
記憶の森

sarsha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の森

【Nコード】

N56770

【作者名】

s a r s h a

【あらすじ】

記憶とは儚いものである。何を覚え、何を忘れるのか。今こそ、記憶を呼び覚ます時。

序章

私が今から話すことは、もうどれくらい昔のことか分からないくらい昔の事だ。だからこそ、人々の記憶の中から消え去り、私にしか語ることが出来ない事となった。

その遙か昔、3人の勇者がいた。

1人は陸を愛する勇者メモリアント
1人は海を愛する勇者シーザライズ
1人は空を愛する勇者スカイロン

この3人が出会った時から、歴史の歯車は、ゆつくりと回り始めた。幾度の困難を乗り越えた3人の勇者は、出会いのしるしに、3本の木を植えた。

1本はメモリアントにより陸に
1本はシーザライズにより海に
1本はスカイロンにより空に

その3本の木は、枯れる事の無い”記憶の木”と名づけられた。しかし、3人は自分の手で未来を掴むために、それぞれ旅立った。そして、やがて国ができた。

陸の国メモリアント
海の国シーザライズ
空の国スカイロン

3人は再び集まり、共に同盟を組んだ。そして、誓った。毎年1

回、集結し、共に杯を交わそう、と。けれども、月日というものは酷いもので、その誓いの記憶もだんだん薄れていった。

人間という生き物は、己の欲望に溺れる者だ。どこの世にも、この時代にも、世を乱す者がいる。殺しては奪い、殺されては奪われる。ただ、それを繰り返すだけ。3つの国は互いを傷つけ、自分を傷つけていった。

”記憶”というものは、とても影響力をもつものである。しかし、”記憶”というものは儚いものでもある。人間の”記憶”はすぐに薄れ、忘れていく。3人の勇者ですら、人間たちの”記憶”の中では、”かつての英雄”でしかない。

私から見れば、人間なんてちっぽけな存在だ。”かつての英雄”、メモリアントは言った。

「我々人間は小さな存在であり、愚かで、何も出来ない。だからこそ、群れで行動するのである」

人間は過去から何も学ばない。過ちから、何も学ばない。やはり、私から見れば、人間は愚かな存在なのだ。争いを繰り返し、傷つきあつた3つの国は、次第に互いの国のことを忘れていった。

陸には、緑豊かなメモリアントがあつたことを。
海には、光り輝くシーザライズがあつたことを。
空には、美しいスカイロンがあつたことを。

幾千年の時を重ねるうちに、それぞれの国は別の道を歩むことになる。

人間の”記憶”が薄れていく中、語ることが出来るのは私だけ。しかし、それももう出来なくなる。私には、「危機」から逃れる力はない。

そして、現在。諦めかけていた私の前に、奇跡が起きた。再び、3国が手を結ぶときがきた。私は、手を差し伸べて助けることは出来ない。

しかし、私はその3人の勇者に、賭けてみることにした。どのよう
に3人が、この冷え切った世界を変えるのか。その先に待つ未来は、平和な世の中になるのか。

ここに今、私の”記憶”にない新しい歴史が刻まれる。”記憶の森”に迷いし3人の勇者よ。この世を変えてみよ。そして、これから訪れる、史上最大の危機を、乗り越えてみよ。

第1章 (1) 森の中

追われる。

追ってくる。

何か、とてつもなく大きいものが。

ふと立ち止まるが、周りは木しかない。

ここは、何処？

誰か、

助けて

深い森の奥。かつての英雄、メモリアントが植えたといわれる”記憶の木”のある森の奥。俺はそこに、たった1人で住んでいる。

そのせいか、他の人間との関わりはゼロに等しい。と言うか、関わりを持つ気もない。だけど、生きるためには何かと必要な物もあ

るわけで。例えば食料であっても、森で自分で見つけなければいけない。時には狩りなんかもある。

今日だって、たまたま無くなった薬草と、たまたま無くなった干し肉をつくる為の肉を手に入れるためにたまたま森の中を歩いていただけなのに。

「どうして俺は…」

女の人を拾ってしまうんだろう。

とりあえず家へと運ぶ。見て見ぬ振りをしておけば良かったものを。だけど、後々恨まれたら嫌なだけだ。その女の人の着ているドレスは所々破れていて、裸足の足は泥だらけだった。だけど、顔立ちはキレイ。もしかしたら、どこかのお偉いさんの御令嬢かもしれない。

面倒くさいことになる前に、この人が目覚めたらさっさと帰ってもらおう。そんなことを考えながら、食料を手に入れることなく、女の人を手に入れる羽目になった。

俺が住んでいる家のベッドに女の人を寝かせると、女の人を家の中に残し、俺は外へ出た。外はすでに日が暮れ、見上げる空には、今にも降り注いできそうな星が輝いていた。見渡す限りの木々と星。この他には何も無い。ただ、無情に時だけが流れる。かつての英雄、メモリアントが

「我々人間は小さな存在であり、愚かで、何も出来ない。だからこ

そ、群れで行動するのである」

なんて言葉を残している。そんな言葉、たとえ、かつての英雄の言葉であっても、俺は信じない。もし、俺がこの世に言葉を残すのなら、こう残す。

「我々人間は卑劣な存在であり、自分を守るためなら、何だってする。だからこそ、他人を傷つける」

ガサガサツ、ガサツ…ガサツガサ

普段、静かなこの森に、何者かの気配が漂い始めた。野犬か？魔物だったら最悪だ。俺は一旦家へ入り、玄関に立て掛けておいた剣を手に取ると、再び外へと出た。

すると、先ほどとは違う気配を感じた。ただの気配だけではない。重たく、邪悪な気配を背負った殺気。木々の間から、その無数の殺気が飛んでくる。数は多そうだ。ゆっくりと目を閉じる。神経を集中させ、その殺気を読み取る。野犬でも、魔物でもない。

この殺気は…

「覚悟！！」

目を開けた瞬間、数人の兵隊が剣を俺に向けて突進してくる光景が目に入った。俺は咄嗟にジャンプし、後ろに下がった。それでも尚突進してくるその兵隊たちに、嫌気が差した。兵隊たちの殺気は恐ろしく鋭い。俺は剣を右手で持ち、その場で空気を左から右へ斬ると、両手で持ち高い位置から振り落とすと、地面に突き刺した。

その瞬間、突風が吹き、兵隊たちは吹き飛び、尻餅をついた。兵隊たちは素早くたちあがり、再び俺に向かって来るが、もはや無駄だった。俺の前には見えない壁が聳え立ち、兵隊たちは何度も何度も跳ね飛ばされていた。

「貴様っ…姫様をどうするつもりだ！」

「姫様？」

一番強そうな兵隊が、地面に倒れながら俺に鋭い視線を送ってきた。

「知らない振りをしよって…！王族を誘拐することは、し、死刑に値するぞ！」

「誘拐？」

この兵隊の言ってることがさっぱりわからなかった。地面に突き刺さっている剣を抜き取ると、その兵隊はゆっくり近づいてきて、俺の足首を掴んできた。

「…放せ」

その兵隊を見下ろすと、冷たい言葉と共に蹴り飛ばした。人の領地に勝手に踏み込み、その上、人を誘拐犯呼ばわり。怒りは頂点に達していた。この兵隊たちの始末をどうするか。そんなことを考えていると、森の奥から馬の蹄の音が聞こえてきた。音をよく聞いてみると、どうやら馬は2頭のようにだった。俺は再び剣を右手に持つと、やってくる何者かに備えた。

「これはこれは、もしかして、貴殿は噂の呪われた子、いや失敬、ロビン・アンソニック様では？」

「へえ…兄上、この人と面識あるんですか」

森の中から、白馬と黒馬に乗った2人が俺の前に現われた。2人とも腰には見事な細工の施された剣を差していた。馬の装飾も凄いもので、いくつもの大きな宝石で飾られていた。

「お前ら、誰だ？」

いかにもどこかの王族であろう身なり。しかし、たとえ王族であろうと、誰であろうと、俺には関係ない。早くこの領域から出て行つて欲しい。

「失礼、名乗りもしないで。わたくしはメモリアント国第一王子、ウェルト・アルフレット」

「同じく、メモリアント国第二王子、ノヴァン・アルフレット」

2人は馬の上から、無残にも倒れている自分の軍隊の兵隊たちを見下ろした。

「さて…わたくしの可愛い妹はどこに？」

「姉上を、どこへやったのですか？」

兵隊たちはよろよろと起き上がり、2人の後ろに整列をし始めた。俺はしばらく考えていた。

姫様？王族？誘拐？可愛い妹？姉上？

俺はようやく頭の整理がつくと、無言で家の中へ入って行った。その後を、馬から下りたウエルトとノヴァンがついてきた。そして家の中へ入ると、俺は横たわっている女の人の頬を軽く叩いた。何回か叩いているうちに、女の方は気が付いたようだった。

「ソフィアン！」

「姉上！」

ウエルトもノヴァンも俺を跳ね除けると、そのソフィアンとかいう人に駆け寄った。すると、ウエルトが腰から剣を抜き、俺にゆっくりと近づいてきた。

「王族を誘拐……。ロビン様には度胸があるようで。我が城まで来ていただけますか？」

来ていただけないのならば、いくらあなたが呪われた子であっても、この剣があなたの血に染まるだけ」

俺は何も言わずに突っ立っていた。じっとウエルトを見る。ウエルトも目を逸らさない。

すると、ドタバタと家の中に兵隊たちが入ってきた。ウエルトはそこでやっと目を逸らすと、その兵隊たちに目で合図をした。合図を受けたであろう兵隊が、俺の後ろに回ってきて、腕を掴んだ。次に、他の兵隊がロープで手首を縛り、俺が何もできないようにした。俺は抵抗をしなかった。ただ、じっとウエルトを見るだけ。

「ここは……どこ？」

小さな声は、震えながら発せられた。

「姉上！ノヴァンでございます！お気づきになりましたか？」

「…ノヴァン？」

続いてウェルトが話しかける。

「ソフィアン。私だ、ウェルトだ」

「ウェルト、ト？」

そのやりとりを聞いていた俺は、妙な感覚を覚えた。ソフィアンを盗み見すると、もうすっかり気が付いているようだった。それなのに、会話が疑問系だ。

「もしかして、記憶が無いんじゃないの？」

何気なく発した俺の一言で、ウェルトもノヴァンも、兵隊たちも一気に俺を見た。ウェルトは再びソフィアンに話しかけた。

「ウェルト、ウェルト・アルフレット…わからないのか？」

ソフィアンは返事をしなかった。今度はノヴァンが剣を引き抜いた。

「貴様っ！姉上に何をした！？ただでは済まぬぞ！」

「…ノヴァン」

ウェルトが、昂っているノヴァンに落ち着いた声で話しかけた。
それでもノヴァンは俺に突っかかってきた。

「姉上が、我が国にとってどれほど重要なお方か知らぬのだな！？
今、この世の」

「ノヴァン！」

俺に切りかかろうとしたノヴァンを、ウェルトは一喝して止めた。

「しかし兄上！」

「とりあえず、ロビン様には城まで来ていただく。ソフィアンも、
城に連れて帰る」

ウェルトがきっぱりと言うと、ノヴァンは俺を睨みながら剣をし
まった。

一夜にして、俺は犯罪者という濡れ衣を着せられ、厄介な事に巻
き込まれてしまったらしい。しかし、これはただの始まりにすぎな
かった。いや、これ以前から、俺の運命は動き出していたのかもし
れない。忌まわしい、「呪われた子」という肩書きが、俺の運命を
狂わした。

(2) ロビン・アンソニック

過去を語るのは、私の役目のようだ。もちろん、私は「呪われた子」ロビン・アンソニックの生い立ちを知っている。私の記憶のほんの一部でしかないが、大事な記憶でもある。

ロビン・アンソニック。彼は、小さな町ルルーエントの小さな農家に生まれた子だった。皆から愛され、アンソニック家は幸せで溢れていた。しかし、彼が生まれたその夜。本当に風の強い、嵐の夜のことだった。1人の魔法使いが、アンソニック家に現われた。その魔法使いはアルフィ・ソード。ロビンの母レアンは、その魔法使いにこう言われた。

「その子を今すぐ手放しなさい。私に渡すのです」

しかし、レアンは頑として渡そうとしなかった。生まれたばかりの可愛い息子、手放せるわけがない。

「この子は、大事な息子です。何故、素性を知らないあなたに渡さなければならぬのです？」

レアンは家の扉を閉めようとした。だが、相手は魔法使い。その魔法使いは、レアンを押しつけて家の中に入った。強引に入ってきた魔法使いは、ロビンに近づくと、袖から杖を出し、ロビンの額に押し当てた。

「呪われし子よ…汝の背負いし運命に従い、その使命を尽くせ。我

の力、汝に与える」

眩い光が家中に漏れ、その光から目を逸らしたレアンが目を開けた時には、その魔法使いは消えていた。レアンは急いでロビンに駆け寄るが、ロビンは何事も無かったかのようにすやすやと眠っていた。

さて、ここまでは彼の運命の始まりに過ぎない。続きの話はその夜の出来事から、さらに1ヶ月ほど経った頃の話になる。母レアンは突然やってきた魔法使いを気に掛けながらも、ロビンを育てていた。いつものように夫は農場へと出掛け、レアンはロビンを寝かしつけ、家で織物をしていた。

そこで、遂にレアンはあの魔法使いの言葉の内容を知ることになる。太陽が真上に昇る少し前。ドアを激しくノックする音が家中に響き渡った。ロビンが起きてしまわぬよう、レアンはすぐに客人を出迎えた。しかし、そこにいたのは客人ではなかった。あの夜にやってきた魔法使いとは別の魔法使いだった。

「私の名はヴォルデオ。あなたが、レアン？」

「え、ええ……」

私は、ヴォルデオも知っている。彼についても私の記憶の一部として語ることは出来る。しかし、彼について語るには少々時間が掛かることが予想される。そう、少し厄介な魔法使いなのだ。彼についてはまだ、話す機会があればそこで話そう。失礼、話がそれってしまったようだ。

「以前、1人の魔法使いが訪ねてきたはずなのだが……ご存知かね？」

ヴォルデオは図々しく家に上がり、ロビンの寝ているベッドまで近づいた。

「ええ、１ヶ月ほど前でしょうか？あの、一体この子は…」

遂にここで、レアンはヴォルデオにロビンに隠された秘密を聞いてしまったのだ。ヴォルデオは口元を緩めると、レアンを抱き上げて言った。

「この赤ん坊は呪われた子。重たい十字架を背負っているのが見える。この子を手放さなければ、この家にも災難が降りかかるだろう。私に、渡しなさい」

その話を聞いても、レアンはロビンを手放そうとはしなかった。それが、ヴォルデオの怒りを頂点まで引き上げることとなってしまったのだ。ルルーエントは本当に小さな町。噂が広がるのは早かった。魔法使いヴォルデオによって囁かれた噂は、一気にルルーエントの町民に知れ渡った。噂には尾ひれがついて町中を彷徨った。そして、ヴォルデオがアンソニック家に現われて数日後のこと。遂に、ロビンの、呪われた子としての運命の歯車が回り始めてしまった。

「悪魔の子、ロビンを殺せ！」

「悪の魔術師の息子め、町に不幸をもたらすな！」

「呪われた子、ロビンを生かしておけない！」

ヴォルデオによって操られた町民によって、アンソニック家は囲まれた。その光景だけは、いまでも私の記憶に鮮明に残っている。

町民は、アンソニック家に火を放った。勢いよく燃え盛る炎の中、レアンはロビンを護ろうと、家の真ん中でロビンを抱きしめてうずくまった。

これは、ヴォルデオがロビンを手にいれたいがためだけに起こったこと。ルルーエントの町は荒れ、アンソニック家は燃え尽きた。何故、そこまでしてヴォルデオがロビンを手に入れたかったのか。それを語るのは、まだ少し早いだろう。

業火の中、ロビンは生き残っていた。レアンは酷い火傷を負い、数日間苦しんで、息を引き取った。父親も、町民によって殺されてしまった。荒れ果てたルルーエントにやって来たのは、最初にアンソニック家にやってきた魔法使いだった。そのルルーエントの様子を見て、その魔法使いは杖を取り出した。魔法使いは、杖を振る。

「命よ宿れ。我が杖に従い、命よ、吹き返せ」

その言葉と共に、木々には青々とした葉がつき、荒れた野原には野草が咲いた。魔法使いは、ロビンを抱き上げた。

「呪われし子ロビンよ。生き延びるのだ。必ず、生きてこの世を変えるのだ」

ロビンのことを「呪われし子」と呼んだのはアルフィ・ソード、そして、ヴォルデオ。何故この2人の魔法使いがロビンのことを「呪われし子」と呼んだかはまた別の機会に話すでしょう。

(3) アルフの街

「行方不明だったソフィアン王女様がみつかったそうだよ」

「どこにいたんだい？」

「それが、”記憶の森”に住むあの呪われた子の小屋にいたんだって」

「なんてこと！」

「しかも、記憶を失われたそうで」

「ああ！あの呪われた子に何かされたに違いないわ！なんてかわいそうな！国王様は気が気でないでしょうね、きつと」

そんな会話が、アルフレット城がある街、アルフのいたる所でされている。そんな中を、ウェルト、ノヴァンを先頭に、ソフィンを乗せた馬車、兵隊たちの行列が通っていた。もちろん、その兵隊の列の中には、後ろで両手を縛られたロビンもいた。俺は別に何も悪い事をしていないのに、と思いながら、ロビンは気だるそうに歩いていた。そのロビンを様子を見て、再び街ではこんな会話が囁かれるようになった。

「見た？呪われた子のあの表情」

「ええ、見ましたとも。悪びれた様子もないし、嫌な目つきだったわよ」

「あまり見るものじゃないわよね、呪われた子の顔なんか」

「大人しくしていればいいものを」

「本当に。王族を誘拐するだなんて、何を考えているのかしら」

「……ちよつとあなたたち、あんまり大きな声で話してると」

会話が聞こえてきたロビンは、行列を見物していた人々の方へ目を向け、会話をしていた女を睨み付けた。

「あら嫌だ。こつちを見ないでくれよ。呪われてしまうわ」

「やだやだ。今日は早く家に帰ってリヤスタの準備でもしようかね」

そう言いながら、女たちはそそくさと家の中に入ってしまった。

リヤスタとは、古くから伝わるメモリアント国の伝統行事であり、毎年春に1週間をかけて行われる祭りみたいなものである。

かつての英雄、メモリアントが始めたと言われ、その年1年の繁栄を願い、幸福を祝う。それぞれの家のドアには、それぞれが子孫繁栄、家内安全を願いながら思い思いに作った花のリースが飾られる。リヤスタの時期は街中が花で囲まれ、平和を象徴するものだった。そんな賑やかな街とは反対に、アルフレット城に向かう一行は緊張感が漂っている。ロビンは依然としてダラダラと歩いていた。

「今日ね、リヤスタの花飾りを作ったのよ。これ、アンタにあげる！」

道端で、可愛らしい小さな女の子が、男の子にリースを差し出していた。リヤスタのリースは、好きな人に送るのにも使われ、友達同士、恋人同士でも交換されることもある。その女の子も、幼いながらに、気持ちを込めてリースを作ったのだろう。男の子はゆつくりとリースに手を伸ばし、照れくさそうに女の子から受け取った。すると、近くにいた子供たちがはやし立てた。

「おい！見ろよ！ピッグがアリスからリースを受け取ったぜ！」

「ピグノアのピッグが！」

ピグノアは一気に顔を赤くして、もらったリースから花をむしりとった。

「俺はピッグじゃない！ピグノアだ！それに、こんな奴からもらったって、嬉しくねえんだ！」

リースの花を全部散らし、最後に地面に叩きつけ、足で踏んだ。それを見たアリスは、目からたくさんの涙を流し、その場にしゃがみ込んだ。はやし立てられたピグノアは、悔しそうに他の男の子たちを睨みつけた。

「おいっ！どこへ行く！！」

兵隊が止めようとしたが、ロビンは聞く耳をもたず、アリスとピグノア、そして、男の子たちのところへ歩いて行った。呪われた子が近づいてきた、といいながら、周辺にいた人々は散って行った。

「どうしてお前はピッグって呼ばれてるんだ？」

「鼻が、豚みたいだからって……みんなが言うんだ」

たしかにピグノアの鼻は、少しだけ上を向いていた。ロビンは、鼻で笑うと、両手を縛られたロープをいとも簡単に解いた。というよりも、指を鳴らし、魔法を使つて一瞬でロープを切ったようだった。しゃがみ込み、自由になった両手で、潰されたリースやむしり取られた花びらを拾い集めた。ロビンがリースの残骸に両手をかざし、目を閉じながらしばらくじっとしていると、次第に残骸が温かく光り始めた。最後に眩しい光が一瞬だけ光った。

「うわぁ！」

アリスは泣くのをやめ、リースを手にとった。

「元に戻ってる！」

アリスは嬉しそうに笑った。それを見て、ロビンも小さく微笑んだ。

「アリス！何やってるの！早くこっちにいらっしやい！」

声のする方を見ると、そこにはアリスの母親らしき女性が青い顔をしながら立っていた。明らかにロビンを恐れているのだ。アリスは不思議そうに首を傾げると、母親の元へ走って行った。ふとアリスは振り向くと、ロビンに向かって言った。

「お兄ちゃんは魔法使いさんなの？」

ロビンはその問いかけに答えることなく立ち上がると、微笑を浮

かべただけだった。

「アリス！あの人に近づいちゃいけません！」

母親はアリスの腕を取ると、足早に家の中へと入って行った。

「お前たちも家へ帰りな。あと、ピッグ」

男の子たちに向かって言うと、ピグノアだけを呼び止めた。暗い顔をして、ピグノアは恐る恐るロビンの顔を見た。

「いいあだ名じゃねえか。仲良くするんだぞ。みんなもお前のことを嫌っちゃいない。羨ましかったんだろ？」

男の子たちは互いに顔を見合わせると、ゆっくりと頷いた。ロビンは切り落としたロープを手に取り、再びパチンと指を鳴らすと、後ろで両手を縛り、列の中へと戻って行った。

それからしばらくして、街の中心、アルフレット城が見えた。アルフレット城を見た瞬間、ロビンの脳裏にはある魔法使いの顔が過ぎった。知らない人のはずなのに、どこか懐かしい顔。そして、アルフレット城に近づくにつれて、懐かしい香りがした。

「アルフィ・ソード……」

ロビンは、頭にふと浮かんだその名前を呟いた。アルフレット城の門には、メモリアント国国王アンドリュエル、王妃アナスタシー、そして、灰色のローブを着たアルフィ・ソードが立っていた。

「戻って来たぞ、呪われた子が。いや、メモリアント国を救う勇者

が
「

アルフィはそう言って、にっこりと笑みを浮かべた。

(4) 呪われた子

「一体どういうことだ！？説明しろ、アルフィ・ソード！」

「ノヴァン、少しは落ち着け！」

俺は王との謁見の間に通され、両手を縛られたまま突っ立っていた。訳がわからないまま連れてこられたと思ったら、今度は目の前で王子兄弟と、魔法使いのようなジジイが口論を始めた。

この城に来るまでに日にちをまたいでしまった。昨日の夜の騒動のせいで夕飯も食べそこね、おまけに夜通し歩かされた。嫌な顔になるのもわかってもらえるだろう。元から体力はあるから、疲れた腹が減った、どうにかしてくれ、とは奴らに頼まない。だけど、人を散々振り回しておいておきながら、放って置かれるのは気に喰わなかった。

「あの……」

弟の方は何故だかまだ怒りを露にされていて、兄の方はそれを抑え、ジジイは弟の方に何かを説明していた。それより、俺に説明しろよ、と思いながら、今度は声を荒げてみる。

「……おい！てめえら！」

謁見の間に俺の声が響き渡った。一瞬にして静寂が訪れ、3人が同時に俺を見た。最初に口を開いたのはジジイだった。

「すまない、ロビン。お前には、随分と苦勞をかけたと思っておる」

「アルフィ様、わたくしも未だに理解しておりません」

「とにかく！アイツは姉上を誘拐したんだ！即刻極刑に処すべきだ！」

結局振り出しに戻り、ノヴァンは自分の考えを突き通そうとした。その時、謁見の間の扉が開き、王のアンドリュエルと王妃のアナスタシーが入ってきた。ウェルト、ノヴァン、アルフィは口を閉じ、静かに頭を下げた。俺はそんな気はさらさら無く、じっと王と王妃を見ていた。

王と王妃が椅子に座り、その隣にはウェルトとノヴァンが寄り添って立ち、ジジイは俺から少し離れた隣に立った。

「ソフィアンは、記憶を失ったようである」

王がゆっくりと口を開き、悲しそうな目で俺を見てきた。この人は、俺を疑ってはいないようだ。目が、そう言っている。

「やはり父上、即刻この者を極刑に処すべきです」

今度はいたって冷静に、ノヴァンは俺を見下しながら言ってきた。

「ノヴァン、ロビンは、決して誘拐犯などではない」

ウェルトとノヴァンは驚いたように王を見た。特にノヴァンは、王と俺の顔を交互に見、呆れた顔をしていた。

「誘拐犯は、言うならば、ソフィアン王女自身でございましょう」

ジジイは王を真つ直ぐに見て言った。

俺はジジイの顔を見た。どこか懐かしい顔と声。会った事も無いのに、この感覚は何なんだろう。それに、何故だか俺はジジイの名前を知っていた。ふと頭に浮かんだ、アルフィ・ソードという名前。こいつは一体何者なんだ。

「姉上自身が犯人だと！？訳の分からぬことを言うな」

ノヴァンは意地っ張りなのか、全く聞く耳を持たないようだった。それに比べてウェルトは、冷静に物事を観察している。こんなやり取りをしている最中でも、ウェルトは俺に視線を送り続けてきていた。その視線は、俺を分析しているようだった。

「先ほどもノヴァン王子殿下にお話し申し上げましたように、ロビンは呪われた子でございます」

「それが何だと言うのだ」

ノヴァンは呆れながら言った。

「私が言う」呪われた子」とは、ヴォルデオの言う「呪われた子」とは、違う意味での言い方であります」

「わたくし、ソフィアンを見てまいりますわ……」

そう言って、静かに王妃が退席した後で、ジジイは再び話し始め

た。

「私の言う”呪われた子”、それは、これから迫り来る過酷な運命に翻弄される、という意味でございます」

俺はゆっくりとジジイを見た。王もウェルトもノヴァンも、静かに次の言葉を待った。

「この者は、私の力を持った正真正銘の魔法使いでございます。魔族でも無いのに魔力を持っている。それ故に、呪われた子とされているようですが、あのヴォルデオは、また違った意味で、この者を”呪われた子”と呼ぶのです」

ジジイはチラッと俺の顔を見ると、再び話し始めた。

「これからメモリアント国に訪れる危機、それは、世界の消滅。そして、それを止められるのは、このロビン・アンソニック。ヴォルデオにとって、この者は悪事を邪魔する厄介者。ヴォルデオの意味する”呪われた子”とは、言葉の通り、ヴォルデオに呪いをかけられた、という意味でございます」

俺は何も言わなかった。自分の周りで何が起きているのかわからなかった。でも、そんなことは関係ない。じつと一点を見つめ、ただただ、早く家に帰れることを願った。しかし、そんな俺の願いとは裏腹に、もうしばらくここに滞在することになった。

「アルフィ様！ソフィアン王女殿下がお目覚めになりました！」

謁見の間の扉が勢いよく開くと、ジジイ同様にフードを着た若い

男が飛び込んできた。

「詳しくは後ほど。今はソフィアン王女の回復の方が先でございます」

「うむ。そうであるな」

ジジイは王に一言断ると、謁見の間を静かに出て行った。取り残された俺は、相変わらず両手を縛られたまま、情けなく立っていた。

「ロビン」

王は俺の顔を真つ直ぐに見てきた。王の瞳は深い緑。瞳は人間の感情の全てを伝えてくれる。

「急にすまなかった。今日からは、この城で寝起きするとよい」

「は？」

急なことに俺は呆気にとられた。まさかここで暮らせとでも言うのか？信じられなかったが、王の瞳は真剣そのものだった。

「ロビンの縄を解いてやれ。それから、空いておる客間に通せ」

指示された側近は、戸惑いながらも命令に従おうとした。

「父上！あやつなど、牢屋で十分ではないですか！」

「ノヴァン！！」

今までもの静かだった王が、突然声を荒げた。ノヴァンも驚いたのか、言葉を失っていた。王は手で側近を動かすと、俺は側近によって縄を解かれた。そして、謁見の間を出るときだった。今まで口を閉じていたウェルトが、俺を呼び止めた。

「ロビン」

俺は立ち止まり、ゆっくりと振り返ってから、睨みつけるようにウェルトを見た。

「お前は、何故生きていたのだ？誰もいない記憶の森で、たった一人、孤独の中を何故？人々から疎まれていたのに何故だ？」

ウェルトの質問を、俺はそのままウェルトに返した。

「じゃあ、お前に聞くが、どうしてお前は生きている？何のため？」

「国を守るためだ。王族に生まれた以上、国を守る義務がある」

ウェルトは俺の目を見ながらすぐさま答えた。俺はウェルトの答えに鼻で笑った。

「可哀想な奴だな。国の為に生きるなんて、ばかばかしい」

「お前の答えを聞かせてもらおうか、ロビン」

「俺の答え？それは俺自身だ。俺は、ここに俺が存在するから生きる。何と呼ばれようと、俺は俺だから」

(5) 育ての親

ここに来て何日経ったのか。朝、昼、夜に運ばれてくる食事を食べ、柔らかいベッドの上で、魔物が襲ってくるかもしれないという万一の場合に備えることなく寝れる。

別に、不自由もないが、俺に合わない生活だった。みすばらしいからという理由で王から与えられた服も、袖を通すだけで虫唾が走った。何度ここから逃げ出そうと思ったことか。だけど、逃げられなかった。

ここに来た日の夜、客間に備え付けられた窓を開け放ち、空を見上げた。ふと下を見たとき、ものすごい高さはこの部屋があることを知ったものの、俺ならなんとかなるか、と安易に考えて窓に足を掛けた。そして、いざ飛び立とうとした時、目の前には見えない壁があるかのようにして俺を遮った。顔面から思いつきりぶつかった俺は、うずくまって痛みを堪えていた。

「逃げ出そうなんて甘い考えは捨てた方がいいであろう。逃げ出したところで、ヴォルデオに見つかるのも時間の問題だ」

痛みを堪えながら見上げた先には、ドアが開いた音もなかったのに、ジジイがローブを身にまとって立っていた。

「……どういうことだよ？てか、てめえ、人のこと変なことに巻き込みやがって！」

「てめえ、か……飯にもお前を8年間育てた育ての親であるぞ。私

の名前はアルフィ・ソード。国王直属の魔法使いだ」

「俺を、育てた？」

懐かしい感じもする。だけど、だからと言って、アルフィが俺の育ての親だという証拠はない。俺はまじまじとアルフィの顔を見た。

「お前に魔力を授けたのも私だ。老いばれだからと言って、私をあなどるでないぞ」

アルフィは持っていたローブの袖から枝のような杖を取り出すと、杖を振って、俺が開けた窓を閉めた。続いて空中でもう1度、2度杖を振ると、俺とアルフィの間に、テーブルと椅子が2脚、そしてもう1度杖を振ったところで、ポットとカップが現れた。

「まあ、座れ」

そう言っただけでアルフィは俺に杖を向けて振ると、体が勝手に動き、無理矢理椅子に座らされた。杖でポットを叩くと、勝手にポットが動き、ティーカップに湯気が出る熱い紅茶を注いだ。

「さてと、準備は整った。それで、質問は何だね？」

俺は呆気にとられて何も言えなかった。

「それでは私から質問しよう。お前の名は？」

「そんなの、知ってるだろ。ロビン、ロビン・アンソニック」

「そうであった。近頃物忘れがひどくてな」

そんなこと明らかに嘘であるのに、アルフィは声をあげて笑った。

「しかし、それ以外に、ロビン・アンソニックに関する情報は何かあるのだろうか……」

「……」

「小さなルルーエントという村に生まれ、生後間もなく両親を亡くす。

それからお前の記憶はどこへ行った？」

物静かに話し続けるアルフィは、時折紅茶を飲みながら、俺の目を見ずに窓の外を見ていた。

「魔力を授けられたが故に、村人やこの国の者から疎まれ、呪われた子と呼ばれる羽目になった。ヴォルデオに呪われ、自分の運命に呪われ、呪われるばかりじゃのお」

「その1つの元凶はアルフィだろ」

ぼそつと言った俺の言葉に、アルフィは笑いながら、これは失礼と言った。

「……記憶を失くしておる……ソフィアン王女のように」

俺は口を閉ざしたまま、紅茶にも手を付けなかった。アルフィは2杯目の紅茶を注ぎ、カップを持ったまま言った。

「記憶とは儚いものだ。人はすぐに忘れてしまう。だから過ちを繰

り返す。しかし……」

アルフィは俺の顔を覗きこんだ。

「記憶を取り戻すことも出来る。お前が望むならば、お前の過去を取り戻すことも出来る」

「何が言いたい？」

「お前の住んでいた森は、記憶の森と呼ばれておる。その記憶の森を、記憶の森と呼ぶ理由さえわからぬまま、そう呼んでおる」

「だから！！何だって言うんだ？」

俺がテーブルを勢いよく叩いて立ち上がった瞬間、俺のカップが倒れ、紅茶がテーブルを伝って床にこぼれた。

「かつての英雄の話は知っておるな？かつての英雄メモリアントは、この国に、枯れる事の無い木を植えた。それが、記憶の木。その記憶の木には、様々な記憶が刻み込まれておる。もちろん、ロビン、お前の記憶もじゃ」

黙ったまま、俺はただただアルフィを見つめるだけだった。

「行ってみるか？その、記憶の木のある場所へ」

それっきりだった。それっきり、アルフィが俺の前に姿を現さないまま数日が経った。

結局ヴォルデオとか言う魔法使いについても聞き出せずに、テーブルと椅子だけ残して、アルフィはドアを使わずに部屋から消えた。窓から星空を眺めていると、森が恋しくなる。恋しくなるなんて言うとは、柄には合わないけれど。

毎日生きていくのがやつとな生活でも、何年もやっているとしたらそれはそれで居心地のいいものだった。時折、魔物に出くわす時もあったけれど、いつもあの剣で倒してきた。ふと思い出したのは、ソフィアンを助けた時に使った剣だった。いつも家の入り口に立て掛けておいて、何かあるとそれを使っていた。

いつから持っているのかはわからない。それにも、強大な魔力が宿っている事は俺にでもわかる。あの剣も、アルフィの物なのだろうか。わからないことだらけの俺は、一層森が恋しくなった。

呪われた子がどうだとか、そんなことは関係ない。俺は俺だ。だから、こんなところに留まってるわけにはいかない。早くここから出たい。そう、心の底から思ったときだった。

「そろそろ、森が恋しくなる時か？」

後ろを振り向くと、そこにはアルフィが立っていた。

深い青の瞳。ずっと吸い込まれそうなほど透き通っている。銀色に輝く長い髪は、後ろで1つに束ねられている。首からぶら下げられた、瞳と同じ色の宝石のペンダントは、アルフィの動きに合わせて輝く。何もないこの部屋の空間で、アルフィは圧倒的な存在感を放っていた。

「今から、あの木の場所へ行く。お前も来なさい」

そう言っ、アルフィは手に持っていた黒いローブを俺に投げ渡した。少しホコリっぽい氣もしたけれど、それくらいが俺には丁度良かった。

「丁度よかった。聞きたいことがいろいろとあったんだ。それと、その場所へ行く前に、俺の家に寄ってくれないか？」

「……別に構わない。彼らが良いと言うならば」

「彼ら？」

アルフィはニコツと意味深な笑顔を浮かべると、今度はドアを使って部屋の外へ出た。城の門までアルフィの後を歩いて付いていくと、そこには見覚えのある馬が2頭、それに馬車が1台、そして、その馬車の前には王子兄弟がいた。

(6) 存在

暗闇の中、先頭のウェルトとノヴァンの灯りと、目の前を行く馬車の灯りを頼りに、俺とアルフィは最後尾で馬に乗った。

俺は黒毛の馬に乗り、黒いローブを羽織って、フードまで頭からすっぽりと被ると、完全に闇に溶け込んでしまったような気分になった。

皮肉にも、呪われた子という愛称がぴったりな格好だった。このまま、存在を忘れられそうになる。このまま、俺さえも自分の存在を忘れそうになる。いつその事、ここから逃げ出そうか。

闇に逃げ込めば、誰にも干渉されることなく、自分の時間を流すことが出来る。存在が、消えてゆくようだった。いや、最初から俺は存在していなかったのかもしれない。とにかく、存在してはいけないんだ、俺は。

「魔力に吞まれるな。そのローブには強力な魔力を掛けておる。お前をヴォルデオから隠すためだ」

白馬に乗ったアルフィが、俺と並んで馬を操る。アルフィの言葉で、頭を占領していたもう一人の俺が姿を消した。

「聞きたかったんだよ……その、ヴォルデオとかいう魔法使いが、俺に何をするって言うんだ」

黒いローブが疎ましい。早く脱ぎ去りたかった。重たくのしかか

る負の力。

「ヴォルデオ・スピニキオン。奴は3つの世界を自在に行き来することの出来る数少ない魔法使いの1人だ」

「3つの世界だと？何だ、それ」

馬鹿馬鹿しくて聞いていられなかった。世界は1つ。しかも、それこそがこの世を支配しているメモリアント国のこと。3つの世界なんて、意味が分からなかった。

「私も詳しくは知らぬ。それを、今から聞きに行くのだ」

「何だよ。知らないなら、最初からそう言えよ」

リズムよい馬の蹄の音に揺られながら、俺たちはさらに森の奥へと入っていく。

「記憶の木に近づいたことはあるか？」

「あるわけねえよ。第一、どの木がその木だなんて知らないんだよ」

それからひたすら沈黙だった。時々襲ってくるもう1人の自分は、何も無い世界に俺を引き込もうとしてくる。

俺は必要のない子。

生まれてきてはいけなかったのに、どうして今生きているのだろう。それは、俺が俺としてこの世に存在しているからだ。だけど、その命は望まれなかった命だ。生きているだけ無駄なのか。いや、

命がある限り生きるべきだ。何も期待されていないのに生きていいのか。期待などなくとも、俺は……

俺は？

俺は、どうする？どう、生きていく？誰もいない、誰も助けてくれない。嫌だ。助けて。

ボクハヒトリダ……

(7) 記憶の木

「ロビンー！」

ハッと気付いた時には、アルフィが俺の腕を強く掴んでいた。

「……お前の家に着いたぞ」

そう言われ、周りをゆつくりと見渡すと、木造の小さな小屋が建っていた。俺の家だ。額から滲み出た変な汗を拭くと、馬から降り、ウェルトとノヴァンの冷たい視線を感じながらも家に入った。

いつの間にか太陽も顔を覗かせ始めていて、小屋の中はうつすらと明るかった。ドアを開けてすぐの所にいつも立て掛けてある剣を手にし、ベッドの横に置いてあったベルトを腰に巻いてから剣を差した。

森の中を、太陽が照らす。すっかり明るくなり、夜は不気味なこの記憶の森も、お伽話に出てくるような、妖精が飛んでいそうな、そんな森に見えた。

「着いたようだな、これが、かつての英雄、メモリアントが植えたと言われている、記憶の木だ」

気付けば、目の前には大きな木が聳え立っていた。大きいなんてものじゃない。その存在だけで人を圧迫する。何か、大きなエネルギーが体に伝わってくる。俺は、何かに取りつかれたかのように馬

を降り、その木に近づいて行った。周りが何を言っているかもわからない。ただただ、その木のことしか考えられなかった。恐る恐る、その木に手を伸ばす。

（よく来た。若き勇者、ロビン・アンソニックよ）

「何？」

（お前を待っていた。ここで、じっと、幾千年の時を）

「どういう意味だ？」

手を伝って、微かな振動と共に声が体に染み込んでくる。

（最大の危機が迫っている。3つの世界を守っていた我々が消滅すると共に、世界が、消える）

「……」

（陸の国メモリアント、海の国シーザライス、空の国スカイロン）

「何のことだ？俺にはさっぱり」

（この世界には、3つの世界が存在する。お前たちの知らない、他の世界）

「おい、ボソボソと何を呟いている」

急に肩を掴まれたと思ったら、一気に視界が開けて見えた。木に手を伸ばしていた時は、木しか視界に入らなかった。ウェルトは怪

訝そうに俺を見ていた。

「ウェルト、待ちなさい」

そう言って近づいてきたのはアルフィだった。アルフィは俺たちの横に立つと、俺と同じように木に手を伸ばした。

「久しぶりじゃのお、メモリアント。お前の声、皆に聞かせてやれ」
アルフィがそう言った瞬間、アルフィの手が眩しく光った。

『アルフィよ、ずいぶんと久しぶりじゃないか。私の話を、聞きにきたのか』

今度はウェルトたちにも声が聞こえるようになったようで、ウェルトやノヴァン、兵隊たちはどよめいて騒がしくなった。俺はじつと、木だけを見つめていた。

「それもだが、できれば記憶を返してもらいたい」

木はしばらく黙ったままだったが、しばらくしてから声を発した。

『よかるう。ただし、私の話を聞いてからだ』

「かまわんよ。時間は、たっぷりある」

そのアルフィの言葉に、またしても木は黙り込んだ。アルフィの厳しい目は、木を見続ける。

『アルフィよ、時間はないのだよヴォルデオが、他の世界を移動し

始めた』

ざわつと風が吹き、木々を揺らす。すごい勢いで鳥たちが木々から離れていく。雲が森を覆うと、あたりは少しだけ、薄暗くなった。とてつもなく大きなものが動き出している。そう思った。体の中の何かが俺に警告する。俺の知らない記憶が、俺が忘れてしまった記憶が、俺に、訴えかける。

オマエハヒトリダ

ボクヲ、コロサナイデ

激しい頭痛が襲ってきて、その場に崩れ落ちた。片膝でなんとか姿勢を保ち、そこからフラフラと起き上がろうとする。俺は何を忘れている？どんな記憶を持っていた？何かを忘れてしまっている。

一体、何を？

『アルフィよ、時間はないのだよ。ヴォルデオが、他の世界を移動し始めた』

「急がば回れと言うのだよ」

気がつけば、俺は変な汗を流して、傍から見たらすごい顔をしていたんだと思う。頭の中で、無い記憶の中をずいぶん長い間彷徨っていたと思ったのに。しっかり地に足を着けて立っている。

『それでは話すことにしよう。私の記憶のほんの一部を』

(8) ヴォルデオ

以前、みなさんにもお話をしたでしょう。遙か昔、3人の勇者がいたことを。陸を愛するメモリアント、海を愛するシーザライス、そして空を愛するスカイロン。

今日お話するのは、以前ロビンの過去を語った時に出てきた、ヴォルデオという魔法使いのお話。そうそう、少し厄介な者だったので、話を省略してしまったのだ。

彼の名前は、ヴォルデオ・スピニキオン。魔法使いの中では、超がついてもよいほどの有名人なのだ。と言っても、悪名高い方ではないのだが。

彼は小さな頃から魔法を得意とした。魔族に生まれたからとはいえ、その魔力は計り知れないものだった。そんな彼は、魔族からも嫌煙された。必要以上の魔力を持ち、それを爆発させる、言わば、危険物だったのだ。

両親からも疎まれ、友達もいなかった。常に独りだったヴォルデオは、次第に自分の中にある孤独や憎しみを魔力に変えていった。孤独は大きくなればなるほど、力を強力にした。憎しみは大きくなればなるほど、力を増幅させた。人の為の魔術などはいらない。人を傷つけ、壊す魔術を求めればいい。そして、彼の行き着いた魔術が、魔族が言う、いわゆる黒魔術というものだった。

彼はあらゆる術を駆使して、ある1つの魔術を身に付けた。それが、自由に空間を移動できる魔術。平たく言えば、瞬間移動とも言えようか。そして、ヴォルデオは、行き着いたのだった。

”他”の世界に。

誰も為し得ない術。孤独と憎しみが生んだ術。孤独が人の温かさを求め、そして、憎しみの無い世界を求めた。しかし、彼の心はそれでも満たされなかった。そして、最後に辿り着いた彼の結論。

それが、自分以外の存在を消すことだった。

自分を認めてくれる人がいないなら、その人たちを消せばいい。自分を受け入れてくれる世界がないのなら、その世界を消せばいい。全てを破壊すれば、自分が否定されることもない。だから彼は、この世を消すことにしたんだ。私たちを枯らすことで、今までの歴史を、今までの記憶を消すことで、世界を抹消しようとしている。

「それが、俺とどう関係するって言うんだ……俺は何も関係無い！」

オマエハヒトリダ

キエタツテカマワナインダヨ

『関係がある。それは、オマエの中にあるのだよ。メモリアント＝ロビン＝アンソニック』

(9) 回想

「なんでまたここに？」

「呪われた子だという噂があるのに」

「ほんとうに、アルフィ様は一体何を考えていらっしゃるのかしら」

アルフレット城の中を、歩きまわる僕は、どうしてここにいいのかわからなかった。気が付いたらここで生活をしていて、気が付いたら、僕には両親がいなくなっていた。ここにいる理由なんてわからない。

「両親はあの子が殺したって本当かしら」

「ルルーエント村の人たちも全員、亡くなっていたらしいわよ」

「アルフィ様は、どうしてそんな子供を」

侍女たちの声が、耳に入ってくる。でも、言っていることがイマイチわからなかった。僕は何もしていないし、ずっとこの城で住んでいる。そう、アルフィ・ソードが、魔術を教えてくれているんだ。僕は、魔法使い。

「おい、ロビン！早くしないとアルフィに叱られるぞ！」

背後から大きな声で呼ばれたと思ったら、そこにはウェルトが立っていた。ウェルトは僕より3つ年上で、何でも出来る。僕は駆け

足でウェルトの元へと向かう。誇らしげに笑うウェルトの顔は輝いていた。ずっと忘れることの出来ないような笑顔。そう、忘れたくない、僕の記憶。

「さて、今日はここまでとしよう。しっかりご飯を食べて、しっかり寝て、また明日、今日の続きをしよう」

僕もウェルトも泥だらけで、顔を見合わせて笑った。服で顔を拭くと、服も泥で汚れた。

「さあ、ロビン。家に行こうか」

「うん……」

ウェルトは城の中へ、僕は森の中へと帰っていく。僕たちの家とアルフレット城は、そんなに離れてはいなかった。それでも、何故か僕は、ウェルトとの間に距離を感じた。

「ねえ、アルフィ」

「なんだ」

狭い家の中、暖炉の火がパチパチと爆ぜる音と、僕たちが豆のストープをすすする音しか聞こえなかった。

「どうして、ウェルトは魔術を習わないの？」

僕はアルフィから魔術を、そしてウェルトは武術を習っていた。

「お前が魔族で、ウェルトが王族だからだ。王族は、魔力を持たない」

「ふうん」

なんとなく納得して、僕はスープを口に含む。暖炉の火は、ゆらゆらと揺れ、たまに爆ぜる。

「ウェルトには、妹と弟がいるんだよね？」

「ああ、ソフィアンは今年で7つ。ノヴァンは5つだ」

「ソフィアンは僕の1つ下なんだね」

「ああ」

「友達に、なれるかなあ」

その言葉に、アルフィはああ、と答えなかった。スープをすすめるのをやめ、アルフィは僕の顔を見て優しい声で言った。

「残念じゃが、ソフィアンとは会えないのだよ、ロビン」

「女の子だから？じゃあ、ノヴァンは？」

この質問にも、アルフィは首を振った。

「残念じゃが」

アルフィは、その言葉しか言わなかった。何故だか僕は、心が痛かった。

その日の夜、僕はこっそり家を出て、一人星を見ていた。

いつもは、アルフィにダメだって言われて、僕が寝るまで見張ってるし、夜中に起きても、窓やドアには鍵がかかっていた。だけど、今日だけは、ベッドの横の窓の鍵が外れていた。チャンスだと思って、僕は抜け出したわけだ。

「ほう。星を見るのが好きかね？」

暗闇の中から声がするかと思ったら、闇の中から人が近寄ってくるのがわかった。

「誰？」

僕は警戒して、半歩後ろに下がる。

「私は魔法使いだよ。アルフィのお友達」

「そう、なの？」

「ああ、そうだとも」

その人は、頭からすっぽりとフードをかぶり、ローブに身を隠していた。

「星に、願い事かね？」

「うん。ソフィアンとノヴァンと、お友達になれますようにって」

僕は空を見上げて、星を見つめた。無数の星が、夜空に輝く。

「なるほど……しかし、大変残念だな」

「……何が？」

魔法使いは、僕の顔をじっと見ながら、顔を近づけてきた。そして、耳元で囁いた。

「お前は、誰からも好かれやしないよ」

背筋がゾクつとして、僕は固まってしまった。

「お前は、望まれない子。消えたって、誰も悲しんだりしない。お前は独りだ、ロビン・アンソニック」

心がどんどん重たくなる。心がどんどん沈んでいく。自分では支えられないほど膨らんだ悲しみ、孤独。目を見開いたまま、僕は闇の中の一点だけを見つめていた。

「両親もいない。愛してくれる人などどこにもいない。寂しい、悲しい、可哀そうな呪われた子。いつそのこと、殺してあげようか？私」

「嫌だ……僕を、殺さないで」

「どうして？お前は独りだ。呪われた、忌々しい子め」

耳元で囁く魔法使いの声は、どんどん体に染み込んでいく。体から溢れてしまうほどの悲しみ。

「お前は独りだ。消えたって構わない」

「僕は独りだ」

どうして僕は生きているの？どうして僕はここにいるの？どうして？どうして？僕は、どうして生まれてきたのだろうか？

「ヴォルデオ！ロビンから離れる！」

鋭いアルフィの声が聞こえてきたかと思えば、目の前を赤い閃光が走った。目の前にいたヴォルデオの顔をかする。微かにフードがずれ、ヴォルデオの頬に大きな火傷の痕のようなものがあるのが見えた。

「貴様！よくも……！」

口元を歪めて、ヴォルデオはロープから杖を出すと、アルフィに向けた。杖の先から蒼い閃光が飛び出し、アルフィの赤い閃光とぶつかって大きな音を立てた。僕は目を大きく見開いて、2人の様子をじっと見ていた。すると、いつの間にか僕の目からは涙が流れていた。

ボクハ、ノゾマレナイコ

ノロワレタコ

「うわあああああ！」

全身を恐怖が襲った。

『なんでまたここに？』

『呪われた子だという噂があるのに』

『両親はあの子が殺したって本当かしら』

『ルルーエント村の人たちも全員、亡くなっていたらしいわよ』

『アルフィ様は、どうしてそんな子供を』

ノロワレタコ

ドウシテイキテイルノ？

気がつけば走っていた。足がもつれて絡まってしまっただけで足を速く動かした。行き先は決まっていなかった。だけど、何かに導かれるように足は動いていた。

ワスレタイ

ナクシタイ

ボクヲ、ケシタイ

足が動かなくなった。木の根に躓いて、僕は派手に転んだ。痛くなんかない。今は、痛みよりも悲しみの方が大きかった。何がいないんだろ。僕のどこがダメなんだろ。何もしてないよ。ちゃ

んと勉強もしてる。言うことも聞いている。

「うわああああ！ああああ！」

声を上げて泣いた。誰かに気づいてもらえるように。声が枯れるまで泣いた。そして、僕はいつの間にか眠ってしまった。地に倒れたまま。

朝、太陽の光が眩しくて、僕は目が覚めた。うつ伏せのまま、転んだまま、僕はそのまま目が覚めた。鳥のさえずりが不規則に聞こえてくる。ゆつくりと体を起こす。周りを見回しても、ここがどこかわからなかった。見渡す限り、木しかない。ふと目の前にある木を見た。どの木とも比べ物にならないほど大きなその木だけは、僕に気づいてくれたようだった。少しずつ少しずつ、ゆつくりとその木に近づく。恐る恐る手を伸ばし、その木に手を押し当てる。何かが体中を駆け巡る。

（その記憶、私が預かるうぞ、メモリアント＝ロビン＝アンソニック）

そこで僕は、再び眠りに就いた。

起きた時には、自分の名前がロビン・アンソニックで、世間からは呪われた子言われて疎まれていることだけを覚えていた。俺は、全ての記憶をメモリアントが植えた記憶の木に預けたのだった。

(思いだしたか、ロビン？お前の記憶を預かっていた代わりに、お前には私を守ってもらうことにしよう)

(10) 戻った記憶

「…どういうことだよ……」

俺は自分を見失っていた。額から汗が流れる。とても嫌な汗だ。頭の中で、記憶の木に預けていた俺の記憶が、ぐるぐると回っている。今まで預けていた記憶が頭の中に入ってくると、文字通り、頭がパンクしそうだった。

『お前の記憶を預かると同時に、その記憶に関する人物からも、お前の存在を消しておいた』

「私の、記憶までっ……」

チラリと後ろを見ると、ウェルトが苦しそうに崩れていた。かうじて右ひざで体を支えているようだが、俺と同じように額に汗をかいていた。頭を押さえ、痛みと闘っているようだ。数人の兵がウェルトを支えようと近寄ったが、ウェルトはそれを拒んだ。

「ロビン……、出会った時から、初めてではない気がしていた……」

『メモリアント＝ロビン＝アンソニックよ、記憶の代償に、私を守ってくれるのだったな？』

俺はなんとか体を奮い立たせ、記憶の木に向き合った。頭の中で、いろいろな声が飛び交っている。10年前に、ここで倒れたことも、今では鮮明に思い出せる。そして、18年前、俺が生まれて間もなく、燃え盛る家の真ん中で、母親レアンが俺をきつく抱き締め、守

ってくれたことも。ここにいるジジイの記憶も、ウエルトの記憶も、アルフレット城での記憶も全て、俺は、思い出した。

「…どういう、ことなんだよ……まだ、よく、わからない」

『私は、間もなく枯れ果てるであろう』

「なんと、メモリアント。随分と弱気になったものだな」

『アルフィよ、お前は随分と年老いたようだな』

「口が達者なのは相変わらずのようじゃのお」

ジジイ同士の言いあいには、俺は呆れていた。人の話を聞かないというところを、アルフィには直してほしいと常々思っていた。俺の疑問に、誰も答えてくれなかった。イライラしていると、ウエルトが俺の横にやってきた。改めてウエルトを見ると、少し照れた。ウエルトの顔が、違って見えた。

「子供の頃の私たちは、なんとも無邪気だった。私は、お前を本当の弟のように思っていたのに、簡単に忘れてしまふとは」

「仕方がないだろ。俺は、ウエルトたちの事を忘れてくて忘れたんだ」

「私はお前が羨ましかった。城の中しか知らない私は、森に住んでいるお前が羨ましかった」

「所詮は身分の違いだ。王族と、そうでない俺の違い」

『2人とも、思い出話はそれぐらいにしておらおう。私の話を聞いてほしい』

「じゃあさっさと話せ！俺はさっきから質問してるだろ！」

俺のイライラを記憶の木にぶつけると、ウエルトは隣でプツと笑った。ウエルトの笑顔を見るのは久しぶりだった。子供の頃と変わらない、キレイな顔立ちに浮かぶ、美しい笑顔。

「記憶が戻っても短気は治らないのか」

「これが俺だ！ウエルトもいちいちうるさいんだよ！」

今度はウエルトが声をあげて笑った。それにつられてか、アルフイの顔にも笑みがこぼれた。一瞬でも、この場が和んだのだ。

『それでは本題に入ろう』

記憶の木が言葉を発した瞬間、木の葉が数枚、俺たちの目の前に落ちてきた。青々と茂っている記憶の木には似合わない、茶色く全く水気のない葉だった。俺とウエルトは、その葉を1枚ずつ手に取った。

『私は枯れることのない木。かつての英雄、メモリアントが植えてくれた記憶の木。私の他にも、記憶の木は存在する。しかし、その枯れることのない記憶の木が、今こうして、少しずつ枯れ始めている。ちょうど、ヴォルデオがここにやってきた18年前のことだ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5677o/>

記憶の森

2010年11月2日12時31分発行